

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 竹 内 航 治

論 文 題 目

『左氏會箋』の基礎的研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	加藤國安
委員	名古屋大学教授	神塚淑子
委員	名古屋大学教授	吉田 純

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

近代の左伝学に大きな影響を与えた竹添進一郎『左氏會箋』(以下『會箋』)は、『左伝』の定本を企図し先行する注釈を巧みに取捨選択して編まれた。その注釈は豊富かつ的確であり、それを元に更なる考察を行うに値する問題が多い。が、先行注釈の出典が掲げられていないため、研究がその前へと進まない要因となっている。『會箋』のこの不足部分について、上野賢知氏は逐一出处調査を行い、膨大な数の先行注釈書を確認し、『左氏會箋遡源』を残した。が、これは未公表のままだった。

論者は所蔵先に赴きこの労作を入手する一方、上野氏の『會箋』稿本の調査にも着目した。それを踏まえて、静嘉堂文庫の『左傳集説』「二十五冊本」「八冊本」「二冊本」、さらに都立図書館諸橋文庫の「三十一冊本」を今回新たに対象として詳細に調査し、竹添注における追加訂正の痕跡から、『左傳集説』(準備稿)→二十五冊本(第一稿)→八冊本(第二稿)→三十一冊本(第三稿)→二冊本(第四稿)という作成順序をより具体的に実証した。また初期稿本の本文に旧鈔卷子本『春秋經傳集解』と一致しない例があることから、稿が進んだ段階で卷子本を底本に定めた可能性があることも指摘した。さらに稿が進む中で新しい注を追加するだけでなく、注を刈り込む作業も行っていたこと等、竹添の一聯の『會箋』稿本の全体像を明らかにした。

また上野氏の『左傳集説』の出处調査に依拠しつつさらに綿密な考察を行い、『集説』に取られる清朝考証学者の説は、主に安井息軒の『左傳輯釋』からの間接的引用であることをより仔細に割り出した。また『集説』作成時に竹添が直接参照したであろう注釈書は十数種程度だが、『會箋』成本の引く注釈書がそれよりもはるかに多いことについて、成本が多く引く文献が『集説』でも全て見ることができることより、基本文献は『集説』作成時にすでに定まっていたとする。その中で特に多く引かれる息軒『輯釋』と昭陽『續考』に注目し、訓詁は主に『輯釋』に拠り、文章表現に関する解説は『續考』に多くを拠っていることに焦点を当て、その具体的内容を丁寧に論証した。

また論者は、『會箋』における「文法」(文章を構成する技法・修辭法)に着目し、『會箋』以前の評注書『左傳鈔』との比較を行い、その連続性を検討した。『左傳鈔』は、「文法」を学ぶための教科書として刊行され、『左伝』の文章表現を詳細に解説したものである。考察の結果、論者は『會箋』成本に取られる『左傳鈔』の評注は少ないが、第一・二稿の段階では『左傳鈔』からの引用が目立つ上、第二稿は『左傳鈔』と同様の頭注式「文法」解説を行っていることを論じた。さらに文法解説の具体的な例として、「伝文の分節化」「伏線の指摘」を取り上げ、竹添が稿本初期まで『左傳鈔』を取っていたものの、成本ではその多くを削っていることを指摘し、それは『續考』に拠ってより簡要な注釈を目指したためとする。

論者は日本左伝学史上重要な『會箋』の書誌研究を基として、日中の膨大な左伝研究史において十分発掘されてこなかった文学面からの開拓に強い関心を示している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

明治期に刊行された竹添進一郎『左氏會箋』は、日中の『左伝』注を広く編集し、かつ考証を加えたもので、『左伝』のすぐれた総合注釈書であり、現在もなお『左伝』研究の基本書である。ただ詳しく個々の問題を解明するには、引用された先行注釈書の全体を知らなければならない。

これについてはかつて上野賢知氏が『左氏會箋遡源』において、簡略ながら書名・人名を逐一明らかにしている。ただ未公表だったため、論者は直接所蔵先に赴き資料を入手し、以後綿密な調査を続け、その成果を『左氏會箋遡源』補義」としてまとめるに至った。まだ一部ではあるが、原拠となった文献の巻数・葉数・当該箇所を明記し、より詳細な情報を提供している。本調査が完了すれば、『左伝』研究に大きな展望をもたらしてくれることになるろう。

論者はまた上野氏が『會箋』の稿本四種を比較し、その生成過程を推定したことに着目する。しかし上野氏は稿本間の関係について具体的に述べておらず、また都立図書館蔵諸橋文庫の三十一冊本も取り上げていない。そこでこの問題を取り上げ、どのようなプロセスをへて成本に至ったのかを、個々の実例に即して説得力のある解明を行った。また『左氏會箋』の準備稿と考えられる『左傳集説』の注釈を仔細に検討し、その主要な典拠が安井息軒『左傳輯釋』と亀井昭陽『左傳續考』であることを明確に指摘した。上野氏の先行研究に依拠したものではあるが、一層緻密に『會箋』の準備段階の具体像を浮かび上がらせたことは評価に値する。

さらに論者は、従来、ほとんど研究されてこなかった日本左伝学の主著たる『輯釋』『續考』が、『會箋』へと収斂していく学術史を詳細に分析した。すなわち訓詁については清朝考証学の成果をいち早く取り入れた『輯釋』を基にして掲げた上で、息軒が参照できなかった諸注釈書も加え補正しているとし、また文章表現についても、『續考』からの引用ごとに丁寧に論証し、これが『會箋』の大きな特色であることを明確にした。さらに論者は、『會箋』以前の竹添の『左伝』評注書に遡って調査し、竹添が当初より『左伝』の文学面にも大きな注意を払っていたことを見出し、『會箋』においても初期の評注が補助的に使用されていることから、竹添の左伝学は桐城派の「文法」(文章表現)論と一貫して繋がっていることを明らかにした。

中国古典の大殿堂たる左伝学にあつて、本論はその周縁部の日本左伝学に関する研究であり、国際的に日本漢学が未開拓であることもあつて基盤整備的段階にあるが、近年、中国・台湾では日本の『會箋』研究や文学・評注面からの『左伝』研究の動きがあり、論者の関心はこの新潮流と軌を一にする。日本漢学を進取的に取り上げ国際的な学術活動の場で左伝学の新生を企図する姿勢は、期待を寄せるに十分である。

以上により、審査委員一同、本論文は博士(文学)の学位を与えるのに相応しいと判断した。